

ないがこゝでは別問題である。

これらの移住者による殘留家族の經濟的援助も内地雇傭の條件如何によつて最近増加してゐるといふ。

確かに内地産業の魅惑的な吸引力は極めて強く、鮮内農家の經濟は彼等の郷土に執著を持たしめぬ事情に立至つてゐるとすれば、今後尙かかる傾向の促進されるのは必然である。

事變遂行中に於ける半島人の内地渡航は益々激増の途をたどると豫想される今日かかる調査研究が尙組織的に實施される要あるは論を俟たぬ所であるが、同時に又、人口排出によつて蒙る朝鮮農村の將來性についても當然考慮される問題が残されてゐる。この方面の研究も亦果されねばならぬと思ふ。(北山正邦)

フォン・ウングアルン＝シュテルンベル

## と著「出生減退の原因に就ての研究」

Der Stand der Forschung über die Ursachen des

Geburtenrückganges, von Roderich von Ungarn

= Sternberg, Schmollers Jahrbuch, 64 Jahrgang

3 Heft 1940

1

最近の「シユモラー年鑑」に、フォン・ウングアルン＝シュテルンベルヒ・v. Ung

arn = Sternberg は出生減退の原因に就いての研究を發表してゐる。彼はナ

フォン・ウングアルン＝シュテルンベルヒ著「出生減退の原因に就ての研究」

チス・ドイツの有する有能な人口理論家の一人であり、一九三七年巴里國際人口會議に於ても、出生減退の原因に就ての報告を試みてゐる。だいたい、今世紀に入つて以來、出生減退の顯著な傾向に直而して、これが原因に就ての研究は、人口理論の中心をなすに到つたのであるが、獨逸に於ては、主として、これが原因を心理的に追求しやうとする傾向が著しいやうである。ブレンタノ、モムベルトの名前で呼ばれる福利說 Wohlfandstheorie も、ヴォルフによつて主張された理性說 Rationalisierungstheorie も、相互に對立した見解を包含するものの、究極に於て、出生減退の原因を、生活をより合理化せんとする合理的思惟から生ずる出生制限の中にも求めやうとする點に於ては一致してゐる。ナチス・ドイツの時代に入つてから、この如き合理化への欲望は、腐敗したワイマール體制下の民主主義獨逸に必然的に結びつく自由主義的、個人主義的世界觀に聯繫せしめて理解され、國家社會主義的、全體主義的世界觀による置換によつて、出生減退を撲滅することが、國家的規模に於て企てられてゐる。出生減退の原因となれる合理的思惟を、個人主義的、民主主義的世界觀の一契機として、より社會的に——いはゞ政治的に理解しやうと試みるのである。シュテルンベルヒは夙に、この如き所謂人口問題に關する世界觀說 Weltanschauungstheorie の代表者として知られてゐるのであるが、彼は本論文に於てはこの如き世界觀の歴史的把握を試みてゐる。即ち、經濟史的、文化的の流れの中に於て、この如き世界觀の形成過程を理解しやうとするのである。彼にしたがふならば「出生減退の原因の理解は、文化史的なる分析をまつてはじめて獲得される」のであつて、世界觀說の代表者と看做されるブルグドゥェルファアの所説も、此の如き歴史的認識を缺くが故に、出生減退の原因の理解の爲には充分でないとされるのである。

シュテルンベルヒは、出生減退の原因に就ての諸家の提説を何れも満足  
を與へうる解答を與へるものでないとし、唯一つの例外として、デュモン  
とヴォルフとをあげたが、夫等に對しても、歴史的認識の缺如といふ點か  
らの批判が保留されてあるのである。

デュモンは周知の如くに、社會的毛細管現象論を唱へ、「民主主義的社  
會秩序の中に於ける、一般的な社會的に向上しようとする欲望」を以て出  
生減退の根本原因であるとした。併し、シュテルンベルヒに従ふなら、彼  
は民主主義的社會秩序に餘りに大きい重要性を與へ、近代的世界觀を成立  
せしめた、より廣汎な經濟史的、文化史的諸條件に就ては彼にあつて殆ん  
ど語られてゐない。民主主義的社會制度自體も、このやうな文化史的、經  
濟史的諸條件の中に定位せしめて理解されねばならないのである。

ヴォルフに對しても、同じ立場から批判される。即ち、ヴォルフによる  
ならば、出生減退の現象は、「根本的に新たなものであり、たゞ時代の  
全體的精神から、文化發展の一構成部分として、文化變動 *Kulturwandel* と  
してのみ理解される」*「産兒制限を導いた文化變動とは、批判的悟性による  
傳統的なるものの驅逐、人間生活の知性化、合理化である」*。併し、その  
謂ふところの文化變動、生活の知性化、合理化は、その限りに於ては正し  
いのであるが、それはより合理的に理解するためには、いま一度、その歴  
史的形成過程のうちに於て採り上げられ、文化史的、經濟史的流れのうち  
に於て理解されねばならないのである。

このやうに、歴史的認識の重要性を強調するところに於て、シュテルン  
ベルヒの所説は、最もよく、獨逸的、歴史學派の本質を露呈するものとも  
考へられるであらう。そして又彼は自家の所説を展開するに際して、屢々  
ゾムバルト、ウェーバーを援用してゐるのである。以下、彼の所説を簡單

に紹介する。

## 二

シュテルンベルヒは、出生減退現象の原因を次のやうに説明する。「出  
生減退は、西歐文化圏の人民が、社會的向上と、その經濟狀態の無制限の  
改善への努力 *Das Streben nach sozialem Aufstieg und nach schrankenloser  
Besserung ihrer wirtschaftlichen Lage* を中心とする一〇の志向 *Gesinnung* に  
支配されたことに原因する。このやうな奮闘努力の精神 *Streberische Ges-  
innung* は、精神的情緒的價値を過少評價し、その行動を悟性的計算的考  
慮によつて決定せしめるに至つた。従つて、子供の數は、合理的原則に従  
つて決定される。」*「それでは、このやうな精神は如何なる條件のうちに形  
成され來つたのであるか。彼は、このやうな精神の史的形成の過程を全面  
的に、合理的に理解するためには、以下の諸點が考慮されねばならないと  
いふ。即ち*

- 一、宗教的竝びに傳統的拘束の崩壞
- 二、一般化された物質主義への傾向
- 三、社會的に向上せんとする欲望の普及
- 四、前資本主義時代の靜態的關係に對して、資本主義的發展に伴ふ一般  
的動態的關係的發展
- 五、合理的精神の普及

要するに、封建制の解體と、資本主義制の成立發展、この經濟的發展過  
程の意識過程への反映としての、政治、宗教、道徳、科學、等觀念形態に  
於ける諸の變革が、近代的世界觀を形成せしめたといひ得るのであるが、  
シュテルンベルヒは、その史觀に依つて、此等の諸要因の中に、一義的な

規定要因を認めないのである。最後に、

#### 六、西歐の經濟的發展の世界的擴大の停止或は部分的後退

があげられてゐる。これは、第一次世界戦争後、世界經濟が入り込んだ一般的危機の段階の意識過程への反映として理解されるべきものであらう。シュテルンベルヒは、これを次のやうに説明してゐる。「更に、大戦後、家族數を少くしやうとする意志は、世界の非ヨーロッパ化と、西歐の世界政治支配の後退が、西歐人民の間に、自己の生活領域が縮小されたといふ感情を起させ、両親をして、その子供に彼等の適當と考へる生活程度を保證する可能性を見失はしめたことによつて、より強化された。この困難は、その逃路を、出生制限に、即ち子供の數を現存する生活領域に適應せしめることによつて、この生活領域の縮小を克服しようとする試みに導いた」。

以下、シュテルンベルヒに従つて、經濟史的、文化史的流れのうちに、近代的世界觀の形成過程をあとづけるならば、次の如くなるであらう。

中世。カトリック教會とスコラ哲學の普遍的權威。神祕主義。ヒエラルキー的社會組織。同業組合的拘束。自給經濟。凡ての領域に靜態的關係が支配する。このやうな社會關係を反映するものとして、性愛に關する歪められた、懷疑的な觀念の支配。舊約の「子供は神の祝福である」、「生めよ殖えよ地に充てよ」に従つたナイーフな生殖。このことは、併しながら、農民のヴァルガーな感性への耽溺を排除するものではない。人口は徐々に、高い死亡率にも不拘増加した。

十六世紀。多數の國のプロテスタント化に伴ふ合理的人生觀の萌芽的形成。このことは既にスコラ哲學内部(Thomismus)に認められる。

近代的科學的思惟的發展(コペルニカス、ブルノ、ガリライ)。普遍的カ

トリック世界像の褪色。近代民族國家の形成。併し尙この時期は、社會生活一般は強い宗教的影響の下に立つてゐたので、性生活の領域には強い影響が認められなかつた。凡ての人爲的避妊と墮胎は有罪であつた。人口増加は、流行病と、高い死亡率、殊に小兒死亡率、戦争によつて阻止された。

十七世紀。Arbeitsethosが形成されはじめる。カルビニズム、ピューリタニズム及び急速に普及した市民精神の影響下にある「祈れ而して働け」*orare et laborare*の思想。計算と交換價值にもとづく經濟的發展。經濟的利潤獲得の解放。經濟によつて富と名聲に到達しようとする努力の解放。合理主義とKücheltismalとが、十七世紀の終りには性關係の中に入り込んだ。避妊の手段は宮廷に普及した。併しカルビニズムとピエティシズムは、このロココ的生活態度に強く對立し、同時にそれは又、オランダ、フランドル派繪畫(ブリューゲル)に見るやうな農民のナイーフな快樂主義とも對立する。一般に、性的節制と戦争と惡疫とが、人口増加を阻止し、三十年戦争は特にドイツ人口を激減せしめた。

十八世紀。前世紀の精神的動向が更に發展する。ロココ趣味はベルサイユを中心としてヨーロッパ宮廷に性的放恣の風習を撒き散らした。その快樂主義 *ans amandi* の觀念は避妊と墮胎の奨励となつた。大陸の此の傾向に、スコットランド、イングランド、北アメリカのピューリタニズム的嚴肅主義が強く對立する。新興ブルジョアの道徳を規律したのは此のピューリタニズムである。シュテルンベルヒは、こゝで、ブルジョア的人間タイプとして、ベンジヤミン・フランクリンをあげてゐる、彼は、その自傳の中で、自ら身につけやうと努力した十三の徳目を數へてゐる。曰く。攝生、沈黙、規律、決斷、節約、勤勉、誠實、正義、中庸、清潔、平靜、謙讓。

純潔に就ては次の如くに語られる。「性交を少くすること。それは、たゞ健康と子供を拵へることの爲にのみなされるべきである。云々」。このやうな觀念は、その生殖への肯定的態度にも不拘、出生數によき影響を與へなかつた。一般に十八世紀は、併しながら、殊にその後半に於ける避妊方法の普及にも不拘、人口増加の傾向を示した。

十九世紀。一時的なロマンティックの反動にも不拘、啓蒙、理性崇拜、無限進歩と自由への信仰の影響下にたつ。人生觀の世俗化と合理化が進行した。技術化と機械化に従つて、感情生活と直觀が拒否された。宗教的なるものは拒けられ、ニヒリズム、物質主義、出世主義にとつて代られた。Preventivverkehr が世紀の末葉には一般的習慣として都市プロレタリアの廣泛な層に浸透した。出産へのストライキ (Geburstreik, greve du ventre) が、マルクシスト、サンジカリストによつて階級闘争の一手段として叫ばれた。所謂産兒制限は、自明なるもの、責任を自覺した両親への命令と考へられるに至つた。一般的生活様式は、物質的となり平板なるものとなり、それが、性關係につよく影響して、出生減退に大きい影響をもつ近代的精神的ミリューが形成されるに至つたのである。

極めて大雑把に纏めれば、シュテルンベルヒの説くところは以上の如くである。(雪山慶正)

## クローゼ稿「和蘭に於ける出生減退」

„Der Geburtenrückgang in den Niederlanden“

von Hermann A. Krose. (Valkenburg, Holland)

Allgemeines Statistisches Archiv 1940 H. 3.

今世紀以來の出生減退傾向が既に現人口維持の最後の線を一線を割つてゐる北・西・中歐諸國の中にあつて和蘭が唯一の例外國であることは白人文明諸國の出生減退を語る諸家の等しく特記するところであるが、併しこの國にも出生減退の大勢は蔽ひ難く、其の諸要因の究明は所謂再生産率の計算と共に國統計局の近年特に研鑽を怠らざる所である。本論文は之ら資料の紹介を中心に稍既往に遡り和蘭に於ける出生減退の真相を指摘しようとしたもので、特に新舊兩教派別出生力の興味ある比較に及んでゐる。

いま出生率について和蘭人口趨勢の概觀を試みるに、前世紀末までの間は多少の起伏こそあれ出生減退をいふ餘地はなく、之を獨逸の其れと比較してみると次の如くで不思議なほど其の歩調を合せてゐる。

	和 蘭	獨 逸
一八四一—一五〇年平均	三三・一	三六・一
一八七六—一八〇年平均	三六・四 (同國の最高率)	三九・三 (同國の最高率)
一八九一—一九〇〇年平均	三三・五	三六・一

然るに今世紀以來兩國とも漸減傾向を見せて、

	和 蘭	獨 逸
一九〇一—一〇年平均	三〇・五	三三・三

となつて居り、和蘭は一九〇八年には遂に三〇%の數値を割るに到つた。たゞ獨逸は之以後その出生率に激落歩調を開始したのに對して和蘭は三〇%を割つたまゝで再び落ちつきを見せてゐた。

一九一〇年	二八・六
一九二〇年	二八・六

従つて今世紀以降北・西・中歐諸國で年々その出生總數の減少せる中にあつて和蘭のみは出生總數に寧ろ増加の跡を示してをり、一九〇五—一九〇九年